

# 時間的展望に主眼を置いたキャリア科目 「ライフプランニング」授業の実践

小山 知子

## I はじめに

本研究の目的は、キャリア科目「ライフプランニング」の授業を通じ、①多様なライフキャリアについて知る、②今までの自分の歩みを振り返り、現在を見つめたうえで未来への向き合い方を学ぶことにより、受講生のキャリアを捉える視点と考えがどのように変化するかを考察するものである。

現在の日本ではキャリアを取り巻く環境は多様化し、男女問わず、仕事の能力を向上させながら、家事・育児・介護などの両立を図る時代に入っている。従来はキャリアというと、一つの組織で長期にわたって仕事し、昇進、昇格しながら上昇していく、というイメージで語られることが多かった。しかし、経営環境の変化に伴い、個人が自律的にキャリアを切り開く必要性が出てきた。加えて、少子高齢化、人口減少により、家庭、地域などにおいて、これまで以上に個人が担う役割にも目を向けていく必要がある。今、そして数年後にどの役割が増えるのか、あるいはどういった役割に重点を置かれるのかを見極めつつ、自分らしい人生を展望することは重要であると考え。

なお、本研究におけるキャリアとは「個々人が、具体的な職業や職場などの選択・決定をとおして、時間をかけて一步一步努力して進んでいくもの」（渡辺, Herr 2001）と定義する。また、時間的展望とは「ある一定の時期における個人の心理的過去と未来についての見解の総体」（Lewin, 1951/1979）とし、論じていく。

## II 授業の実践の背景

### 1. 働く環境の現状と課題

社会の変動が大きく、組織を超えて多様な人材が働く時代になった現在、「終身雇用・男性」の典型的な労働者モデルがあてはまらない労働者が増えていっていると言われている。

Baruch, Y. (2004) によれば、従来のキャリアの選択は、初期の年齢で一度だけなされ、キャリアの変化の方向は直線的なものであった。これからのキャリアは、さまざまな年齢で選択が行われ、多様な方向に変化するものとしている。

次に多様な形態での働き方について、注目したい。厚生労働省の研究会は、正社員数300人以上の全国の企業および従業員を対象に、調査を実施した（厚生労働省2012）。これによると、正社員の中に複数の雇用区分を設定している企業は約半数である。そのうち、職務限定の区分が9割、勤務地限定の区分が4割、労働時間限定の区分が1～2割である。一見すると希望する働き方をいくつかに分け、従業員の選択肢を広げているように思える。しかし、勤務地限定正社員は給与が低い、昇進・昇格の見通しが持てないなど、デメリットを感じており（武石2016）、キャリア形成面でのハンディが不満の背景にあることが明らかになっている（武石2013）。

さらに女性の働き方に焦点をあてると、妊娠・出産・育児期において、仕事と家庭の両立をどう図るかが課題となる。政策レベルでは2017年10月に育児・介護休業法が改正された。企業においては勤務時間短縮制度、企業内託児所の整備がなされ、個人レベルでは、配偶者の意識の高まりなど

により、正規社員の出産・育児による退職が減少している。しかし、何らかの事情でいったん退職した無業の専業主婦のうち、86.0%は何らかの時点で就業を希望しているが、就業形態はパート・アルバイト、派遣・嘱託・契約社員などの非正規雇用が87.5%である（国立社会保障・人口問題研究所 2015）。その背景には、知識や経験などが活かせるような求人が少なく、子育てを優先するために時間の融通がきく働き方を選択しているのが実態である。高学歴女性の能力や経験を活かした形での再就職の労働市場が成立していない（武石2001, 脇坂・奥井2005）という課題が長年にわたって続いている。

一般的な大学生は、インターンシップやアルバイトを通じて社会の一端を見てはいるものの、こうした多様な就労形態で働く人たちの実情については知り得ない状態ではないだろうか。しかし、近い将来、自分事となる可能性も十分にありうる。働く環境の現状と課題を理解したうえで、今後の自分を見通す視点、すなわち時間的展望を持つことは、社会に出る準備を行ううえで重要だと考える。

## 2. 学生の置かれている状況と課題

児美川（2016）は、若年層に対して「やりたいこと」や「就きたい職業」を追求する風潮にあるのではないかと指摘している。例えば小、中学校時代に「将来の夢」についての作文を書かされる、日常生活において「夢を持つ」といったメッセージを送る著名人を見かけるといったことが該当する。しかし、夢がかなえられなかった時にどうすべきかについて、誰も言及しようはしない。このような状況下で、学生たちは周囲の理想論に惑わされることなく、ライフプランニングしていく必要があるといえる。

下村（2013）はワークブックの中で、Gottfredson（2002）の制限・妥協理論について言及している。性別と職業に対する良し悪しの感じ方（職業威信）の2つにより、無意識に自分の職業選択を制限しており、まっさらなもの見方で

職業の世界を見る必要があると述べている。

以上のことから、現在、大学生が職業選択し、将来を見据えるにあたり、やりたいことが明確な場合、それが実現できるかどうか、また実現できたとしても雇用環境の変動が激しく、どこまで持続できるかを見通せないことが課題だといえる。さらに性別や職業に対する見方に対する制限、思い込みが障害となり、職業を選ぶ際に制限がかかっていることも予想される。

そこで、キャリア科目「ライフプランニング」では、①多様な働き方、キャリアについて知る、②目指す職業に就くことができなかった場合の選択肢を持つ、③職業に関連する性役割観と職業と関連する威信の序列を解除したうえで選択する、つまり時間的展望に主眼を置いた授業を実践していくこととした。

## III 本研究で実施した授業概要

### 1. 毎回の授業の流れ

第1回を除き、毎回教室入室とともに座席の指定を行い、学部、学年を混ぜたペアあるいはグループができるよう、配慮した。

最初に授業目的の説明後、安達・下村（2013）によるワークブックを援用し、個人ワークを行った。その内容をもとにペアワーク、4名一組でグループディスカッションを行う中で他者の考え方を尊重し、受け容れていくよう、伝えた。最後に授業での気付きについて、200字程度にまとめたレポート（以下、200字ワーク）を提出してもらった。次の授業で200字ワークのうち、受講生に共通するもの、また優れたものについては内容を共有した。なお最終回まで、座席指定、200字ワークとフィードバックは継続した。

表1は15回の内容を示したものである。

表1 「ライフプランニング」 15回の内容

授業回	テーマ	授業の目的
1	キャリアとライフプランニング	担当教員の紹介、ライフキャリアとワークキャリアの関係を知る
2	自己概念を理解する	自己概念とは何か、自分はどのような人なのか、理解する
3	これまでの自分を振り返る①	過去の出来事を振り返り、自分らしさの原点は何か、認識する
4	これまでの自分を振り返る②	学習や就職などに対する不合理な思い込みを修正する
5	現在の自分と過去の自分とのつながりを考える	過去から現在にわたる質問について答えながら、自己理解へとつなげる
6	ライフプランニングと働き方①	職業威信とは何かを知り、職業選択の幅を広げていく
7	ライフプランニングと働き方②	企業の採用活動、多様な雇用形態、企業の施策について理解する
8	キャリアヒストリー①	育児休業を取得し、就業継続する女性のキャリアの実例を知る
9	キャリアヒストリー②	倒産の危機、合併・吸収を経験し、同一企業で働き続ける男性のキャリアの実例を知る
10	キャリアヒストリー③	同一の職業で雇用形態を変えながら転職を繰り返し、現在に至る男性のキャリアの実例を知る
11	キャリアヒストリー④	結婚・出産により長期離職した女性が現在の仕事に就くまでの過程を知る
12	現在の自分とこれからの自分について考える	現在から未来にわたる質問について答えながら、自己理解へとつなげる
13	ライフプランニング②	今後、自分自身に起こりうる様々なライフイベントについて知る
14	ライフプランニング①	自分の設計図を具体化するために、今すべきことは何か、考察する
15	総まとめとレポート提出	自分の設計図について個人発表する

## 2. キャリアヒストリーの紹介

33才～50才までの4名のキャリアヒストリーをもとに、第7回から4回連続で、育児休暇の取得、就業中断、時短制度を利用した勤務、企業の吸収・合併、非正規雇用から正規雇用への転換、あるいは正規雇用から非正規雇用の選択などの実例を紹介した。働く環境と人生における役割の変化について、理解を深めるとともに、受講生自身が同じ状況であったらどう判断するかについて、考える時間を設けた。

また、希望する職業に就いた2名については、学生時代から就職に至るまでの過程について詳しく伝えた（第10、11回）。また、希望する職業を持たなかった1名は、どのようにして自分に合った仕事にたどり着いたのか（第8回）、高校時代に小学校教員になりたいと思っていたにもかかわらず、断念した1名は、どのように自分の気持ちに折り合いをつけ、就職したのか（第9回）、紹介した。同時に、受講生自身にも自分が同じ立場だったらどう選択するか、考え、グループで話し合い、多様な考えに触れる機会を持つようにした。

紹介する4名のキャリアヒストリー対象者のプロフィールは表2のとおりである。

## 3. すごろく盤を活用したグループワーク

受講生が、自身の過去、現在までを振り返り、未来を展望することで、本来自分が持っていた興味関心領域を思いだせるよう、第5回と12回では、すごろく盤を使ったグループワークを行った。すごろく盤の質問は、第5回では過去から現在、第12回には現在から未来に向かって進んでいく構造になっている。過去の質問に答えていくことで、忘れかけていたかもしれない記憶を引き出す可能性がある。例えば、「子供の頃にはまっていたものは？」という質問にとまった際、ゲームが好きになったきっかけを思いだし、それにまつわる出来事から自分自身の興味関心領域を再認識することができる可能性がある。

また、すごろく盤の質問に答えている学生に対して、興味深い内容であれば質問をする、自分も同じ思いであるなら、共有するといった反応を心がけて進めるよう、開始前に指示し、授業中も必要に応じて促した。

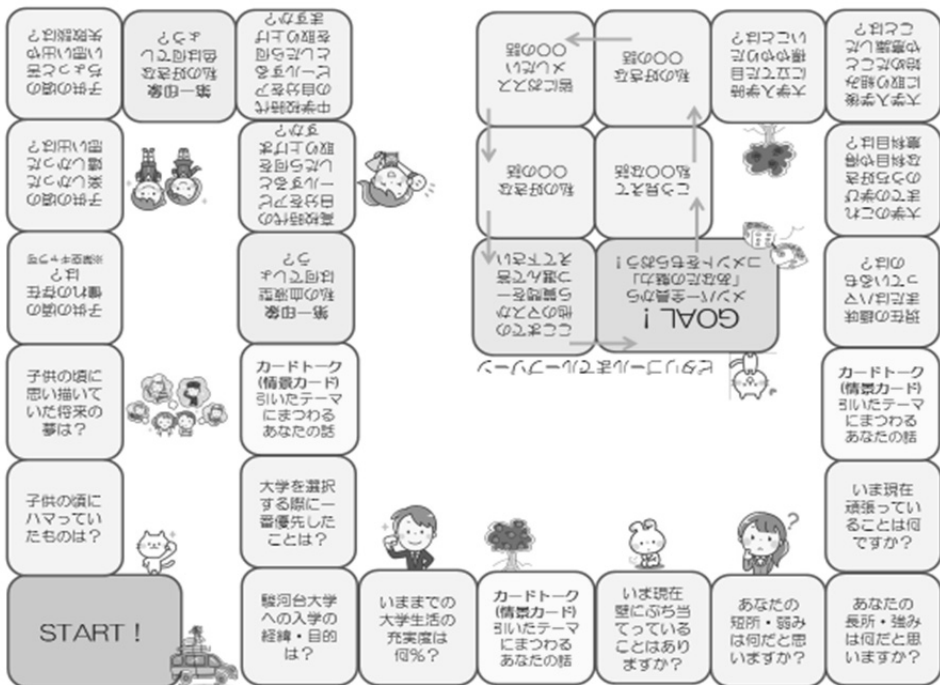
なお、このすごろく盤は、サインキャリアデザイン研究所代表の篠原功治氏と共同で作成したものであり、下記に示す。

表2 キャリアヒストリー対象者のプロフィール

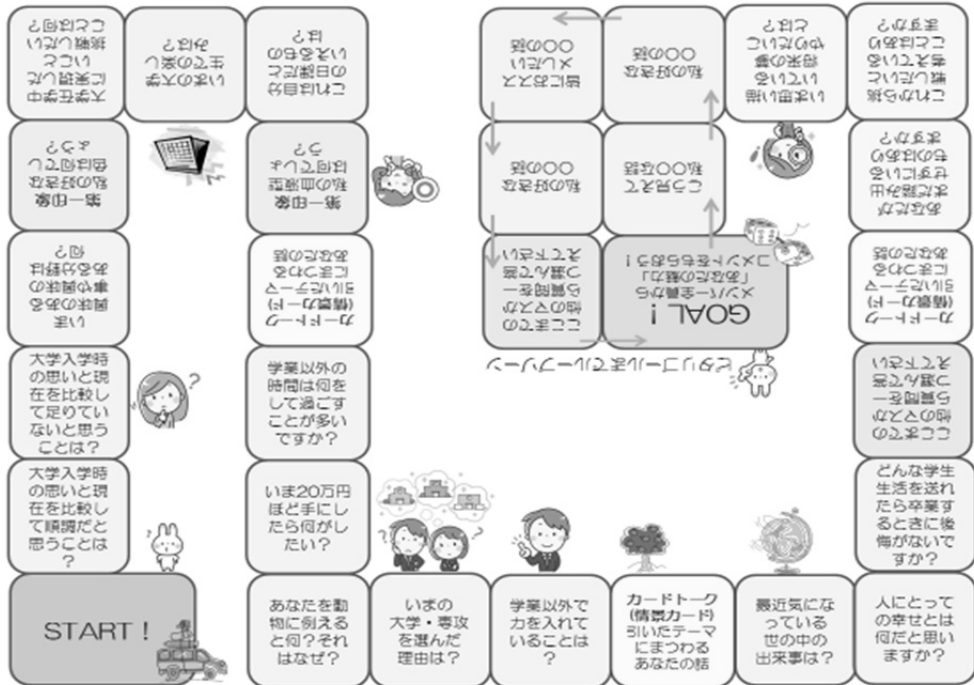
ライフヒストリー	大学卒業後のプロフィール概要
① (第8回授業)	公益財団に就職→28歳で退職し、自己研鑽と称して海外を旅行(1年間)→30歳で派遣会社に登録し、教育・コンサルティングを主な業務とする企業に派遣就業→31歳で同社派遣社員→32歳で同社正社員→36歳で結婚→38歳と42歳で出産(育休2回・この間に総合職から一般職に転換)→総合職に戻る
② (第9回授業)	生命保険会社に就職→25歳で結婚・子供二人→33歳で長野に転勤→35歳ころから金融不安となり、社内でリストラが始まる→同社で勤務しながら転職活動、1社内定を得たが思いとどまる→リストラ対象となった先輩社員からのアドバイスで、ファイナンシャルプランナー1級取得→42歳で勤務している会社が外資系保険会社に合併・吸収→現在に至る
③ (第10回授業)	ゲーム会社の技術者派遣として正社員で就職(大手ゲーム会社に短期間出向し、プロジェクトが終了するとほかの企業に出向)→28歳で給与の低さを理由に、退職を決意、非正規でも収入が多い方が良く考える→業務委託契約で仕事を請け負う→31歳で婚約を機に正社員への道を模索→32歳で大手ゲーム会社に正社員として再就職し、現在に至る
④ (第11回授業)	航空会社の客室乗務員として就職→26歳で結婚→27歳で大阪ベースに転勤・別居で勤務を続ける→28歳で退職→29歳と31歳の時に出産→35歳で小学生対象の英語教室を主宰→40歳でシンクタンクの研究員に応募し、業務委託契約で大学の授業を担当するようになる→英語教室を閉鎖、現在は教員として再就職

※ ④は筆者自身

第5回 過去から現在についての質問で構成されているすごろく盤



第12回 現在から未来についての質問で構成されているすごろく盤



IV 授業実践の概要

1. 受講生の属性と分析方法

本研究は、上記に述べた内容の授業を通じ、受講生のキャリアを捉える視点と考えがどのように変化するかを考察するものである。そこで、2017年秋学期の受講生のうち、第1回および第15回の両方の授業に出席者した68名の自由記述のレポートを分析する形で研究を進めた。受講生の属性の内訳を「表3 調査対象者の属性」に表す。

なお、調査対象者には本研究にて自身の書いたコメント、データ等を使用する旨、口頭にて説明したうえ、文書にて承諾を得ている。

表3 調査対象者の属性

学年	男性	女性	計
2年	21	10	31
3年	34	1	35
4年	2	0	2
計	57	11	68

第1回に、①本授業の受講目的、②第15回受講時にどのような自分になっていたか、という題目で自由記述してもらった。②については、キャリアを捉える視点の変化の有無に関わる記述がある部分を文章ごとに抽出し、佐藤（2008）を参考にカテゴリを作成して分類・集計した。抽出された文章は124、7つのカテゴリに分類された。

## 2. 第1回授業に関する分析と結果

第1回授業で提出されたレポート記述のうち、表4は本授業の受講目的について表したものである。これによると、受講生の約7割は単位の取得を目的の一つとしていることが分かる。また受講生の中には、先々のプランが明確でないと不安を抱いている可能性がある。下記はその例である。

この授業を履修したのは、自分の夢や目標が分からず、この先に不安しかないと、少しでも何か見つかるように、と思ったからです。(中略)何か重要な決断をしなくてはいけない時、いつも楽な方に逃げていたので、しっかりと授業を通して改めて自分のこと、将来のことに向き合おうと思ったからでもあります。(2年 女性)

受講後に望む自分に関する自由記述のうち、記述が多かった文章を抽出し、カテゴリに分類・集計したものを表5に示す。

ここから読み取れることは、授業を通じ、今後

について少しでも見通せるようになりたい、という思いが共通している。そのためにも何に力を注げばよいのか、また、必ず必要となる他者との関わりについても意識していき、自分を成長させていきたいと考えていると思われる。下記はその例である。

先を見据えた行動ができるような人間に変わってたいです。今の自分は目の前にあることに全力で取り組んではいますが、後先考えずに行動しています。そのため、今、自分がやっていることが将来、どんな風に役立つのかが見えません。(中略)将来を常に考えた行動ができるようにしたいです。(2年 男性)

僕は3年の後半に差し掛かっているが、進路については何も決まっていないので、15回が終わる頃には進路を固めてほしいと思う。ただ日常を過ごすのではなく、やりたいことをしっかりと考えて日々過ごしていく。(3年 男性)

表4 本授業の受講目的 (68名 複数回答)

受講の目的	人数
単位取得のため	46
将来のことを考えることは大切で自分のためになる	17
科目名から面白そうだと思ったから	9
前期に担当教員の授業を受けてよかったから	7
友人、先輩に勧められて	6
この先に不安がなく、少しでも何か見つけたいから	3
参加型の授業だから	2
時間割の都合	2
人生を見直すきっかけにしたいから	2

表5 受講後に望む自分の姿 (68名 複数回答)

第15回終了時にどのような自分になっていたか	人数
将来像をはっきりとさせられるようになりたい	16
どんな職に就きたいのか、明確にし、目標を見つけて行動できるようになりたい	15
コミュニケーションを取り、積極的な人になっていた	15
どのような働き方をして、どのような人生にしていきたいのか、明確にしていきたい	8
これまでを振り返り、将来のイメージを見据えられるようになりたい	7
今よりも人間的に成長していきたい	6
自信を持って就職活動に臨めるようになっていたい	3

### 3. 第15回授業に関する分析と結果

第15回のレポートのタイトルは、「返却されたレポート、それに対するコメントを読んでください。それらをベースに本授業による気付き、自身の変化について記述してください。」である。

第1回時に提出されたレポートに対し、受講生が「～のようになりたい」と記述した部分下線を引いたうえで筆者がコメントを付し、返却した。例えば

私は15回が終わる頃には、誰と話す時でも変な抵抗がなく、上手にコミュニケーションをとれるようになっていきたいです。なぜなら、社会に出ると、さまざまな人と会話をしていくことになるので、将来困らないようにしていたほうがよいからです。

との記述に対して

コミュニケーション力について、今はどうですか？話すことだけでなく、書くことを含めて、自分の考えを伝える力がついたと感じていますか？もし力がついたと感じているなら、第1回と時よりも自分に自信が持てるようになっていないのでしょうか。

いう具合に、何を振り返れば自身の変化の有無や度合に気づけるか、具体的にイメージし、記述できるように配慮した。

上記によって抽出された文章は100、これを2つに分類し、「ライフプランニングに対する考え方」と「第1回の自分と比較しての気付き」とした。前者は7カテゴリ、後者は5つのカテゴリに分類された。

#### (1) ライフプランニングに対する考え方

ライフプランニングに対する考え方は7つのカテゴリに分かれた。もっとも多かったのが、「少しずつ未来への展望が持てるようになり、ある程度の道筋が立てられるようになった」である。

受講生自身が在籍する学部の授業、資格課程、大学の行事への取り組み方が変化したという記述が多く見られる。以下は未来への展望のうち、資格取得を目標とした例である。

第1回の授業時には、将来どんな仕事に就くといったことが全く決まっていませんでした。しかし、このライフプランニングの授業を通じて、自分の今までとこれからを考えることができ、いくつかの業界に絞ってより細かな未来を想像することができました。(中略)ひとまず近い目標として資格取得ということを決められました。また部活と勉強の両立は難しいと思っていましたが、最初からすべてをやらなくてもいい、少しずつコツコツとやっていくことができればいいとこの授業で感じました。(2年 男性)

将来に対し、不安しかない、と記述していた前出の受講生は次のように書いている。

今までの私の現在の気持ちとしっかり向き合い、同じ経験をしてきた人、はたまた自分が一切、関わったことのない世界にいる人の話を聞き、まだはっきりとは決まっていますが、ある程度なりたい職業を決めることができました。(中略)ライフプランニングで感じたことや思ったことをまとめているうちに自分がどうなっていたいか、という理想の筋道が立てられるようになりました。(2年 女性)

次に多かったのが、自己理解が深まった、という記述である。こちらは200字ワークを書き続けたことが後押ししたようである。次はその記述内容である。

この授業では今の自分を見つめ直し、将来の自分を想像し、そのための対策をどのようにしたらよいかなどを考える場であった。また考えるときのポイントもその時々提示され、訓練されてきたと思う。私も漠然としていたものが、レポート

を書いているうちに、自分はこういうことをしたいんだとか、そのためにどうしたらよいかを考え、自己理解を深めることができました。(3年 女性)

キャリアヒストリーの紹介により、キャリアは複線かつ多面的であると捉えた受講生もいる。一つの企業に就職したら、定年退職するまで継続就業するのが当たり前と捉えていた受講生の例である。

実際の社会人の方々のキャリアを見てきたが、いろいろな道がありながらも進む道を模索し、一生懸命生きていることが伝わってきた。私は最初「転職」はよくないことだと思っていた。しかし、先生を含め、人生はその人そのものなのだということを強く感じた。(3年 男性)

一方でライフプランニングに対する考えは変わらなかったという記述も見られた。将来を見通そうとするとかえって混乱してしまう受講生もいることが分かる。

キャリアヒストリーではゲーム業界にも派遣があると知った。どこの業界のどの職業に就きたいという考えはまともらずに、目の前にある自分のやるべきことを書いたレポートが少々重荷に感じ始めた。(2年 女性)

これまで見てきたように、授業での取り組みがきっかけとなり、今後の見通しが立てられる場合

と、第15回の授業という限られた時間の中では考えを明確にできない受講生とがいることが分かる。学年、学部、置かれている状況により、様々であることから、明確化できずに終わった受講生を煽ることのないよう、配慮する必要がある。

表6は抽出したカテゴリとその人数の内訳を表したものである。

## (2) 第1回授業時の自分と比較しての気づき

第1回の時の自分と比較しての気づきは、5つのカテゴリに分類された。もっとも多かったのが、「知らない人とのコミュニケーションを心がけ、会話を楽しめるようになった」である。以下の2名は受講の目的の一つにコミュニケーション力を高めることを挙げており、今回の記述にも表れている。

私は元々人と話せるようになりたいという目標があってこの授業を受けました。最初は授業に出るだけでドキドキして緊張が収まらなかったけど、回数を重ねていくうちにグループワークで初対面の相手と話す時も落ち着いて会話ができるようになったと感じました。(3年 男性)

第1回の時よりも確実にコミュニケーション能力は上がっていると思います。グループワークでやってきたことがもっとも活かされたのは駿輝祭です。(中略)私は「オンキャンパスワークショップ」という授業を受けた中の有志とSONY MUSICの方々と一緒に「お化け屋敷」を展開しま

表6 ライフプランニングに対する考え方 (68名 複数回答)

ライフプランニングに対する考え方	人数
少しずつ未来への展望が持てるようになり、ある程度の道筋が立てられるようになった	21
自分とはどんな人なのか、どうありたいのか、自己理解が深まった	10
自分のライフプランの答えが見つからず、先を見据えることはできていない	9
中途採用、転職はよくないという認識を持っていたが、道は一つではなく、自分の意志でいつでも変えることができる	7
就職活動へ取り組み方が分かった	4
意外とみんなも先のことが決まっていなかったと分かった	2
目標ができた	2



した。そこでは日々、話し合いが続いたので、自分から意見を言うことも多く、ライフプランニングで行ったことを活かすには最適の場でした。(2年 男性)

毎回のペアワーク、グループワークを行うことで、自分が最初に話すワークを進めやすい、と気づいた受講生が2割ほどいた。

グループワークをする時は誰かが会話を始めたからそれに乗っかって自分も会話に加わることが多かったのですが、この授業を受けていくうちに自分から会話を始めることが多くなったと思う。ただ単に誰かを頼って沈んだ空気になるのが嫌だから、自分から会話を始めようと思ったのだが、結果的にそれでグループ活動がうまくいくことが何度かあった。(3年 男性)

「計画的に行動できるようになった」という記述の具体例としては、「スケジュール管理のメモアプリを活用し、計画的に行動するためにメモをしている」、「就職活動に向けて時間を逆算し、地元のハローワークに通っている」といったものである。

「変化を感じない」の記述の例として「他者から話しかけてもらえば話が出るが、自ら積極的に声掛けすることはまだ難しい」が挙げられる。できるようになりたい、という気持ちを汲み取り、接していく必要がある。

表7は抽出したカテゴリとその人数の内訳を表したものである。

## V 総合考察と今後の課題

本研究ではキャリアを「個人が、具体的な職業や職場などの選択・決定をとおして、時間をかけて一歩一歩努力して進んでいくもの」と定義し、15回の授業を通じて、キャリアに対する見方、考えがどのように変化したかを自由記述のレポートをもとに分析した。

その結果、約85%の受講生は第1回の授業時よりも今後の見通せるようになった。具体的には、資格の取得、就職活動に向けて行動計画を立てるに至ったこと、自分とはどんな人かという自己理解が進み、目の前の部活動、サークル活動を行う上での目標が明確になったことが挙げられよう。一歩一歩努力して進んでいくものという、本研究のキャリアの定義と重なる部分でもある。

また、これまでキャリアヒストリーの紹介により、マイナスのイメージを抱いていた転職に対し、見解の幅が広がっており、Baruch, Y. (2004) によるキャリアに対する捉え方に沿って、多面的になりつつある。また、年齢を重ねるに従って増える人生における役割、それに伴う雇用形態の選択、自身では予期しない企業側の事情による人員整理、転勤などの実例は、将来の自分にも起こりうる出来事であり、時間的な展望を持つうえで一助となったと思われる。

一方、本授業を通じて変化を感じないと回答した受講生は、約15%いた。そのうち、「学んだことを役立てて計画していくことはあまりできなかったと思う。でも人生は長いので、コツコツと計画を立てていきたい」「大学卒業後の自分を明確にすることができなかったが、どのようにして就職

表7 第1回の時の自分と比較しての気づき (68名 複数回答)

第1回の時の自分と比較しての気づき	人数
知らない人とのコミュニケーションを心がけ、会話を楽しめるようになった	29
グループワーク開始時に自分が一番最初に話し始めるようになった	12
将来のことを考えて、計画的に行動できるようになった	6
他人と話し合うスキルを始め、自己理解、行動など変化を感じない	4
自分の考えに自信が持てず、消極的だったが自信を持って意見を言えるようになった	2

活動に取り組むのかは明確になった」と併記するなど、自身のキャリアを築くことに対し、前向きに捉えている様子が垣間見られる。あらゆるワークを行い、正しい情報と知識を授けたのなら、自身で答えを出せるようになるまで待つ、という姿勢が重要なのではないかと思えてくる。

また、多くの受講生が第1回授業時に挙げていた「コミュニケーションを取り、積極的な人になりたい」という項目については、多くの受講生が会話を楽しめるようになった、自ら発言できるようになったと記述していた。これは、ペアワーク、そして本授業用に作成した、すごろく盤を使ったグループワークによる効果によるものといえよう。

ペアワークにより「自分の素を出しやすく、お互いのことがよく知れた気がする。家に帰ってからも、その日の授業を反省するくらい、印象深かった」「友達以外の人とペアになると、自分にはない考え方や見方に気づかされ、自分を成長させてくれた」、すごろくでは「フレンドリーに会話することができ、自分の考えも言いやすく、苦手なコミュニケーションを楽しくすることができた」「普段は話しぶりなことでもすごろくというゲームを通せば、話しやすく、とても良かった」との記述が見られた。

以上のことから、時間的展望に主眼を置いた本授業の実践により、受講生のキャリアへの捉え方は、おおむね受講開始時より広がり、今すべきこと、そして1～2年後、その先自分がどうなりたいかが明確化したといえよう。

最後に本研究の課題を3点、挙げたい。まず、本研究は調査対象者が68名と少なく、男性の比率が高い点である。今後も調査を継続し、より客観的な分析を試みたい。

次に、コミュニケーション力の向上を実感できた、という記述は多く見られたものの、同じ大学で学ぶ者同士の間でのことである。よって、受講生自身がより多くの社会人と出会う中でどれだけ発揮できたか、という点を追跡調査することである。

最後に、目標設定ができたという受講生に対して、半年後、1年後という具合に、長期にわたり、本授業による取り組みの効果を図ることである。この先、大学生の置かれている状況に変化が生じることも予想される。また、受講生自身も自分を見つめ直すうちに方向転換する可能性もある。本授業で学んだことを活かし、どれだけプランニングしていくことができるのだろうか。さらに、先の展望を見通すことができなかつたという受講生へのフォローも必須である。

授業が終了しても、学生が置かれている状況を踏まえ、キャリアコンサルタントとして、定期的な面談し、目指す職業に就けなかつた場合の支援をしていくことが使命であると考え。この点を授業担当者としての筆者の課題としたい。

## 参考文献

- 厚生労働省、『「多様な形態による正社員」に関する研究会報告書』, 2012年, (最終アクセス日 2018年1月28日)  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/16b.pdf>.
- 国立社会保障・人口問題研究所「第15回出生動向基本調査(夫婦調査)」, 2015, (最終アクセス日 2018年1月28日)  
[http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15\\_reportALL.pdf](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf).
- 児美川孝一郎『夢があふれる社会に希望はあるか』ベスト新書, 2016年。
- 佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社, 2008年。
- 下村英雄「妥協は負けじゃない 制限・妥協理論 (Circumscription and Compromise Theory)」  
 安達智子・下村英雄『キャリア・コンストラクション ワークブック 不確かな時代を生き抜くためのキャリア心理学』金子書房, 2013年, 58-65頁。
- 武石恵美子「大卒女性の再就業の状況分析」脇坂明・富田安信編『大卒女性の働き方 女性が仕

- 事を続けるとき、やめるとき』日本労働研究機構，2001年，117-141頁。
- 武石恵美子「勤務地限定社員の処遇の実態と就業意識—『正社員多元化調査』の再分析2—」『日本労務学会第43回全国大会 研究報告論集』，2013年，151-174頁。
- 武石恵美子『キャリア開発論 自律性と多様性に向き合う』中央経済社，2016年。
- 脇坂明・奥井めぐみ「なぜ大卒女性は再就職しないのか」橋木俊詔編著『現代女性の労働・結婚・子育て—少子化時代の女性活用政策』ミネルヴァ書房，2005年，184-207頁。
- 渡辺三枝子，Herr，E.L.『キャリアカウンセリング入門—人と仕事の橋渡し』ナカニシヤ出版，2001年。
- Baruch，Y. “Trans forming careers : from linear to multidirectional career paths Organizational and individual perspectives,” *Career Development International*, Vol. 9 No. 1, 2004, pp. 58-73.
- Gottfredson, L.S. “Gottfredson’s theory of circumscription, compromise, and self-creation.” In D.Brown(Ed.). *Career choice and development* (4<sup>th</sup> ed.) San Francisco: Jossey-Bass. 2002, pp.85-148.
- Lewin, K. “*Field theory in social science: Selected theoretical papers.* NewYork: Harper & Brothers., 1951, (猪俣佐登留訳 (1979) 『社会科学における場の理論 (増補版)』政信書房。